

ラーベの「飢餓牧師」について

第一 部

平 田 達 治

文学史家リールは十九世紀中葉の時代を捉えて、保守勢力としての貴族・農民階級、革新勢力としての市民・労働者階級の二つの勢力によって代表されるとしているが、これら四階級のうちでも農民及び市民階級の果たした役割の大きかった事を指摘している。然るに、彼自身も附言している如く、この市民階級にあつては進歩改革に向けられた動的性格と、古い伝統習慣を守り市民的義務に忠実であらうとする靜的性格とが共存していた。そして、ドイツ文学史上市民階級をあらわす概念として問題にされるのは寧ろ後者であり、斯る傾向は當時の諸作品にも現われているところであつて、「飢餓牧師」成立の前後は、歴史的に所謂市民文学の一頂点を成した時期でもあつた。ゴットヘルフの「下男ウーリ」(一八四一)、「小作人ウーリ」(一八四九)に始まる写実主義のドイツ市民文学は、次いでフライタークの「借りと貸し」(一八五五)、オットー・ルートヴッヒの「天と地の間に」(一八五六)、ケラーの「緑のハインリッヒ」(一八五六)、シュティフターの「晩夏」(一八五八)、それにこのラーベの「飢餓牧師」(一八六四)の五篇の、市民階級の若者を主人公とする長篇小説を矢継ぎばやにうんだのである。これらの詩人達はすべて正規の教育過程か

ら多少なりとも逸脱した道を歩み、詩人になるまでには種々の屈折を体験しなければならなかったと云う共通点を持っているが、それにも増して注目すべきは、大家名門の出身で最初は音楽家や新聞記者を志望し、貴族にかかえられたこともあるルートヴッヒやフライタークにしても、彼等の立っている地盤はやはり市民階級であり、彼等の創作した世界はすべて市民社会であったと云う事である。「天と地の間に」の主人公アポロニウス・ネッテンマイアーが、曾って自分の恋人であった兄の未亡人との結婚を承諾せず、兄の子供達の面倒をみながら彼女を義姉として遇する生活を送るのは、まさに中庸の精神、均衡の感覚、リールの名附けた「夢の生活」と云う市民的倫理観によるものである。ミールケはその著「十九世紀ドイツ小説」の中で、「殆んどの市民家庭の新しい友」となった「借しと貸り」

が描いているものは、端的に云って市民的誠実さ勤勉さとその讚美、及び貴族階級の利己性とその経済的没落であると述べている。⁽¹⁾ こうした一連の作品をルートヴッヒは「詩的リアリスム」*Der poetische Realismus* なる言葉によって捉えようとしたのであるが、これに對してもう一つ別の文学思潮があった。それは主として進歩的市民階級の動的な一面を代表し、大都會を中心に萌芽し始めていた精神的プロレタリアトを背景とする「青春ドイツ派」等の傾向文学である。ヘッベル、シュティフターがこの傾向文学を否定し、「詩的」なる語がこの対立概念として用いられた事はあまねく知られているが、ラーベもこの「飢餓牧師」の劈頭に建設的飢と破壊的飢とを並列させ、その何たるかを描こうと決心した時、そこには普遍的な意味の他に明らかに時代的な意味が附加されていた。即ち、彼が生きた人間を描き、生きた世界を捉える詩人である以上、普遍的な *Hunger* の世界法則をば直接的時代人、当時の社会に生きる人間に於いて照観せしめようとの考えのあったことは否定出来ない事実である。かくてこの小論は、ラーベの最もポプラーな書であるこの「飢餓牧師」の内容を具体的に検討することによって、この書が如何に詩的リアリスムの代表作であり、且つまた傾向主義文学からは遠く、人間の内面性を重視した彼独自の作品であるかを三回

に渡って論じようとするものである。

この作品はラーベのシュツットガルトへの移住（一八六二、七）後の最初の長篇小説であるが、その背景を成す伝記的要素として次の三つの体験を見逃がすことは出来ない。即ち、自己の創作力の認識と詩人への自覚を高めた教養旅行（一八五九、四―七）、ドイツ民族の一員であるとの社会成員としての自覚に基く政治への関心と参加、ベルタ・ライステとの婚約とそれに続く新しい生活の三つがそれである。一八五九年四月六日、最初イタリアをその目的地として出発したラーベは、ライプツヒ、ドレーズデンに有名作家や出版商を訪ね、自己の有名になる事を意図した文士としてこの旅行を始めたのであった。ライプツヒに訪ねたフライタークは、「あなたはイタリアに何を求めようとなさるのか、イタリアに対することのような愛着はドイツ人の罪な遺伝的欠陥だ、あなたはポーランドへ行くべきでしょう」⁽⁴⁾と意味深い助言を与えた。イタリアではなく、非浪漫的な北国に於いて旅の Hunger を満たすべきだとのこの助言は、この五月イタリアを舞台として奥仏間に勃発したサルディニア戦争のため彼の旅行がドイツ人によるドイツ各地への旅行となった時、一層の重みる加えるのである。ゲーテのイタリア旅行から七十年、此処に時代の政治的社会的転換、民族的意識の勃興が円満な宇宙的古典主義人間にかわるに、社会的国家的人間としてのみその存在を許すレアリテートの世界をつくり出していたことを物語っている。こうして南独の各地に展開された新しい体験は、彼を根底からかえてしまった。四月二十六日ドレーズデンから母に宛て「僕は大変有利な旅をしています――一八六一年になって平和が結ばれた時、僕がどれ程立派になっているかあなたに見て頂きたいものです」⁽⁵⁾と書き送った文士としてのラーベは、プラーク、ウイン滞在を契機に、「僕は三週間ウインに滞在し、多くのことに關して知識や認識を深めました、僕にとって興味のあるものはすべてみました……僕は今生き、まなんでいるのです」⁽⁶⁾と書きおくる詩人になっていた。彼はこの時、最早や文士や書肆との關係を求める Hunger ではなく、世の中や人間の生活自体

を求め、ドイツの本質に触れようとする新しい Hunger を抱き始めていたのである。かくてこの旅行は、純粹の詩人的 Hunger と金や成果や影響を問題とする文士の Hunger との相違を彼に深く自覺させた点で、この小説とも密接な關係を持つてゐる。しかもザルツブルク滞在中の六月二十一日には、それが具体的な形で現われた。この日、長靴をもつていった靴屋と町の博物館でみた「感情」と題する絵とが彼を捉らえた。この絵には暗がりの中で手探りにお金をあさっている男の姿が描かれてあつたが、これは金への飢にかられた男の象徴的な姿として「飢餓牧師」に取入れられた。作中のモーゼス・フロイデンシュタインがそれである。文士か詩人かの岐路に立たされていたラーベは、この絵の金をあさると男と靴屋及びその部屋につてある光の玉とに於いて、この時既に物欲の飢と眞の飢との姿を胸中に描いていたのであろう。一八六一年十二月十二日のメモに初めてあらわれる「飢餓牧師」の名は、このようにこの旅行中の体験にまで遡るのである。この年は又彼の婚約の年でもあつた。婚約時代のラーベは抒情詩人ラーベの時代でもあり、この年の九月二日には、彼の兩極性を示す二つの極めて對蹠的な詩をつくつてゐる。その日の午前十一時に出来上つたと伝えられる詩は、「人間の手」と題する世界の暗さをうたつたもので、一八六三年一月「ライラックの花」に収められた。ところが午後には書かれた詩は、婚約者の幸福をうたつた明るい詩で、「飢餓牧師」の主人公ハンスが恋人フレンツヘンとの婚約の喜びをうたつた詩として、この作品の三十五章に収録された。この二つの詩は、当時ベルタとの婚約を果し最も幸福な筈の恋の時期にあつたラーベが、その喜びを卒直にうたいながらも、他方結婚と云う問題を中心にして立ち現われて来たヴォルフエンビュッテルの名士社会の習慣、⁽⁸⁾更にはベルタ自身とその家族とが夫となる彼に寄せた期待の中にあつて、彼がますます身動きのとれない拘束と重い責任とを感じていた事実を如実にあらわすものであろう。妻の持参金(二千ターラーだったと云われる)は犯すべからざるものとして手をつけず、近い将来に新しく持つ家庭や、うまれて来るべき子供達を自分の力で支えて行かねばならなかつた彼ではある

が、一方詩人としての魂を捨て読者の趣味に降することは、今やみのりつつある詩人としての自覚が到底許さないことでもあった。こうした婚約問題に關しても彼の内にはばげしい緊張が展開されていたのであり、明暗相對蹊的な詩の成立はこのような両極性の反映である。だからこの意味からも、相對立する飢を主題とする小説の構想が彼の頭の中で次第に出来つつあった事は否定出来ない。そして、六一年の十二月十二日にははじめて彼のノートに、「短篇飢餓牧師―ツェンカー牧師」と言うメモが現われている。ところがこの短篇のプランは、教養旅行以前より考えられていた現代教養長篇小説を書いてみたいと云う欲求のため暫く中断した。こうして出来たのが「森からの人々」(一八六二)である。この成功が、最初短篇として計画していた「飢餓牧師」を、建設的 Hunger と破壊的 Hunger とを代表する二人の對照的人物を主人公とした發展長篇小説に拡大させる動機となった。最初の草案は南独移住後の六二年十一月六日にかかっている。建設的 Hunger と破壊的 Hunger と云うあの原構想を、靴屋の息子とユダヤ人の若者との對置によつて纏めた三部各九章より成るものであった。そして六二年十二月から翌年の三月まではこの草案の完成についやされ、同月二十八日に起稿された最終稿は、約十ヶ月間かきつづけられて六三年十二月三日午後一時五十分ようやく完成した。これより先の七月二十三日にはベルリンの出版商オットー・ヤンケが、未だ第一部しか完成していなかったこの作品の出版権を買取り、続いて十月には第二部を、十二月には最後の稿を受取っている。そして最初この作品は、ヤンケによつて新しく企画された「ドイツ小説新聞」の六四年一月号に掲載され、四月の復活祭まで十二号に連載された。又三月三十日には單庫本にもなったのである。しかしこの完成作品と先の原草案との間には可成りの差違が認められ、最初の三部各九章は三部各十二章に拡げられ、特に第三部に於いて、筋の統一と内面化の意味から恋人の死とモーゼスの死の構想を放棄し、海と船火事のモチーフの採用の為に第三部の舞台を荒野から北海に臨む淋しい漁村に移している。この変更の意味する所についてはその箇所具体的に述べるが、最終稿の時にも三部

各十二章に分けられていたこの三分割の方は、六七年五月の第二版の際ラーベに無断で廃棄され、今日の如く通しの三十六章となった。これに対し彼は七五年になお元への復帰を要求したが、第三版の時にそれを諒承するに至った。しかし内容的には第一章の冒頭にも「三部からなる書」とある通り、十二章、二十四章で切り得ることはかわりがない。かくてこのような背景と成立事情を持つこの作品に関し、次にその筋を素描しながら論を進めてみよう。

ノイシュタットのクレッペル街に住む靴屋アントン・ウンヴィルシュと妻クリスティーネとの間に男の子が生まれる。その子は靴屋の大先輩ハンス・ザックスとペーメ及び同業の伯父とに因んでハンス・ヤコブ・ニコラウス・ウンヴィルシュと名附けられる。父は自分の満されなかった知識や学問に対する憧れをこの息子に於いて実現させてやろうとするが、間もなく肺炎で他界する。彼の遺した一冊のノートは、彼の精神を伝えるものとして妻によって大切に保存される。第一章―未亡人となった彼女は、「わが子の最初の物質的な飢を癒し、わが子の夢を実現してやれる」ようにと、シュロッターベックおばさんの勧めで洗濯婦になり、朝は三時前に起き、夜は八時に死ぬ程疲れて帰宅するのだった。母の留守中はこのおばさんがハンスの面倒をみ、聖書や童話を読んでやるのだった。第二章―就学期の来たハンスは、消火唧筒置場を改造したジメジメする穴のような貧民学校に入学する。その教師シルバーレッフエルは、結核と貧困と生徒達の度を越えた悪戯に苦しめられながら死んで行く。伯父によってその臨終の床につれて行かれたハンスは、先生の不幸な一生の話をきいて深く感動し、弱い者の味方になろうと決心する。そして何時もいじめられているユダヤ人のモーゼスを助けてやろうとして仲間となぐりあい、二人はモーゼスの父の古物店の中へこるがり込む。これがハンスの一生を決定することになる。第三章―モーゼスはハンスの家の丁度向いの地下で古物商をいとなむユダヤ人ザムエル・フロイデンシュタインの息子であった。彼のうまれたのはハンスと同じ日の同じ時刻であったが、彼の母はその時産死し、父の手で育てられて来たのであった。それから間もなく二人は貧民学校を去

って、市立学校へ行く。その頃二人はゾフィーと云うひよわな女の子と知合い、三人で野や山に出かけ自然に親しむ。しかしゾフィーは前からの約束でもあるかのように間もなく死ぬ。この死は、モーゼスよりもハンスにとって、先生の死以上に強い悲しみと深い印象を与えるものであった。第四章――ハンスはモーゼスの店にある色々なものから、自分の未だ知らぬ世界の在る事を予感する。モーゼスの父もアントン同様、学問に大きな尊敬の念を持っていたが、アントンとは違ってそれを金と同様力を得るための手段と考えていた。勿論彼も息子の大成を望み、息子の将来の中に生きていた。パリの七月革命のあった頃ハンスは高校に進学するモーゼスに羨望し、一生靴屋でいるのはいやだ、進学したいと訴える。伯父は彼をしかり、靴屋にラテン語はいらないと反対する。第五章――息子の願いをどうかしてかなえてやりたいと考える母は、その夜まんじりともせず、真夜中に父の遺した小箱をとり出し、その中の金で望みをとげさせてやろうと決心する。そして進学に反対する伯父と彼女やおばさんとの間に奇妙な戦いが続く。ハンスは、或る日曜の朝、一人で高校教授ファックラー氏を訪ね、涙を流して自分の希望を訴える。その日の午後、この教授先生さんの訪問を受けて説得された伯父はハンスの進学に同意する。かくて彼は自分の手で自分の進路を決定した。第六章――ハンスとモーゼスは再び机を並べることになるが、一方は貧乏の為、他方は宗教の違いから他の学生と交際することは尠かつた。モーゼスは聡明であつたが、効利的で冷淡な人間になっていた。他方ハンスはロマンティッシュな氣持を大切にする眞想家で、未だみぬ世の中に対し種々の Hunger を抱いていた。ファックラー教授は貧乏なハンスに同情し、司法官トリュプラー家の家庭教師に世話してやるが、初めてみる上流社会に彼はただ呆然とするのだった。第七章――才人モーゼスは首席、ハンスも努力の甲斐あつて次席で卒業する。卒業試験に合格して帰って来たハンスをかこみ皆が喜び合っている頃、向いの家では戸がとぎされ、なかでは大変なことが起つていた。翌朝ハンスが教会から帰って来ると、ザムエルが倒れたと皆が騒いでいた。しかしモーゼスは平然とし、先程の

金勘定の最中にうめいて倒れたんだ、おやじはもうおしまいだろうと言いつける。昨夜は一体どんな事が起っていたのだろうか。息子卒業を喜んだザムエルは自分が金持である事をはじめて息子に教え、大金を見せる。この瞬間からモーゼスは金の飢にとりつかれ、彼にとつて父は最早「余計もの」「邪魔もの」になる。そして夜が明けぬ前に父をたたき起した彼は、父に昨夜の金の勘定を強い、強迫する。息子の態度におどろいたザムエルは、床に落ちた金袋の音で発作を起し倒れたのであった。―第八章― 父の死後モーゼスは店の品物を売りさばき、店をたたんで大学へ行く準備にかかる。ハンスも同じく大学入学の準備をし、再びモーゼスと共に大学町へ赴く。―第九章― 大学ではハンスは神学を、モーゼスは哲学を専攻する。ハンスは自分の憧れを満すことが出来ないままにも熱心に講義に出席する。一方モーゼスは決疑論の講義でハンスと顔を合わせるが、卒業の頃には教授や学生間で色々な意味で有名になっていく。卒業に間近い或る日、彼は「もっと広い水を求め、泳ぐことを学ぶためパリへ行くよ」と冷やかな言葉をのこしてハンスのもとを去ってしまう。一人ぼっちになったハンスを故郷へよびもどしたのは、母の病気を知らせる伯父からの手紙だった。―第十章― ハンスは故郷への帰り道で、馬車の窓にみた青白い悲しそうな処女に強く惹かれる。その夜、宿で再びこの処女と彼女につきそっている退官中尉ゲッツと云う老人に出会う。彼等は偶然にもハンスの友人モーゼスを知っていた。この処女の父が死んだ時、モーゼスは彼女によくないことをしようとし、老人は彼の手から姪の彼女を救って、弟の所へ送り届ける途中だった。―第十一章― 故郷に着いたハンスは、母の病気の為の帰省だったのに、何か安らぎを覚えるのだった。病床の母は、父ののこしたガラス玉に過去の色々な想いを懐しく思い返すのだった。そして息子に父の Hunger のことを説き、「男は光のために、女は愛のために血を流す」ものだと教える。息子がこの冬教区省の牧師候補の試験問題を仕上げたことを知った母は、自分の義務の終わったことを感じ、彼が初めて説教する日に静かにこの世を去る。―第十二章―

まず著者はこの書で何を描こうとしたかを開巻第一頁で次の様に述べている。

「私はこの美しい本のなかで Hunger を取扱おうと思う、それが何を意味し、何を欲し、何を為し得るかを描こうと思う。……」

Hunger が個々の点でどのような破壊作用と保存作用を営みそして世界の終りまで営み続けるかを私は描くことが出来よう。」
(S.5)

Hunger は元來感覺的な空腹感を表わす語で、日本語の「飢」に当り、肉体的物質的な意味に使用されるのが普通である。源初的には物質的な意味だけに使用されたこの語が、精神的な意味で用いられるようになったのも不思議ではない。聖書のマタイ伝五章六節には、「義に飢えかわいている人たちは、ちいさいである」》Selig sind, die da hungert und düstert nach der Gerechtigkeit《とあるのもそれである。だからこの書は、》Hunger《と云ふ言葉に含まれている物質的意味と精神的意味、およびその保存作用と破壊作用と云った対照的性格を發展の観点から捉え、》Hunger《の何たるかを夫々を代表する二人の人物を通して、描こうとするものである。主人公達の少年時代、故郷の世界を描く第一部には、ハンスとモーゼスがうまれた二つの相異なる環境、彼等の Hunger を規定することになる二つの違った世界が前面に押し出されている。ハンスの Hunger に何らかの形で影響を与えた人々には、父アントン親方、母クリスティーネ、シュロッターベックおばさん、母方の伯父グリュネバウム親方がいる。靴屋のアントンは仕事熱心で、自分の職業を非常に愛していたが、芸は身を助けず一生貧乏な靴屋で終らねばならなかった。このような職人の彼は、勿論正規の教育を受け学問をしたのではなく、文字を正しく書くこともおぼつかなかったのだが、先輩ザックスに多大の尊敬を寄せ、精神的なものを身につけ、知識を得たいと常に考えていた。「彼は出来るだけ多くの書を読んだ、そして読んだものを大抵理解した」のだった。このように、彼の知識に対する激しい Hunger は、身の貧しさの故に満し得ぬまま胸中にひめられていた。のち母は亡き夫を追想して、その Hunger を

わが子に説いている。

「理解のわるいわたしですが、もし世の中に飢と云うものがなかったら、大した事は出来ないだろうと何時も考えていました。……お前のお父さんはわたしが云っているような飢を抱いておられたのですよ、そしてお前はそれを受継いだのです。お父さんは何時も自分や世の中に満足しておられたものではありません。しかしそれは、他の人々が自分より立派な家に住んだり、馬車に乗ったり、またそれに似たことをしている故の嫉妬の気持からではなかったのです。いえ違ひのです。お父さんには理解出来ず、どうかして学びたいとおおもいになったものがあまりにも沢山あったからこそ、苦しめたのです。」(S. 159)

この文章でアントンは、二つの型の飢のうち精神的な面の飢を抱いていたと主張されているが、この知識に対する Hunger は、物質的なその如く明確な対象と満足とが容易に得られぬ所から、無限なものへの欲求と云う色彩をおびるようになる。同時に彼の様な小市民階級と云う社会性を考慮する時、裏街の暗い仕事部屋で一生を送らねばならぬ靴屋の彼にとっては、このような Hunger は自分の周りの世界には見出せないもの、社会的に求めることの許されぬものへの Hunger、そのために「血を流さねばならぬ」光への Hunger と云うことにもなる。精神的な Hunger は、目に見える具体的な形では容易に満たされず達成されないからとて、後述のグリュネバウムの場合の様に物質的な方向へ屈折しなければ、アントンの場合のように無限なものへの憧憬、永遠の理想への欲求と云う要素が加味されて来るのである。故に、アントンの知識や学問に対する Hunger は理想的なものへの欲求であり、暗から光へのそれであった。彼はこの自分の Hunger を自分では満し得ない事を知った時、その Hunger 自体を屈折させるのではなく——容易に変更出来るものならそれは理想への Hunger とは云えない——これを達成すべき主体を不可能な自己より無限の可能性を孕むわが子へ移し、その子のためにすべてを献げようと決心したのである。その誕生を久しく待ち望んでいた息子に自分の学問知識への Hunger を受継がせようとしたのである。

「彼は認識に対する自分の熱心な努力をすべて息子に譲渡した。父が達成出来なかったものを息子に達成させようとし、又息子はそうしなければならなかった。生活のためにアン-ton親方の行く手に投げかけられた幾多の障害が、未来のウイヴィルシュの人生行路をときず様なことがあつてはならなかった。彼には自由に道を見出せるようにしてやらねばならなかった、そして生活の貧しさや苦勞のために彼の知識の門、教育の門がとざされることがあつてはならなかった。」(S. 16)

職人と云う低い身分の故に生活におわれて自分の充し得なかった Hunger をそのまま息子に譲渡し、自分の代りに息子がそれを達成してくれるようにとの切望は、換言すれば親の子に寄せる愛の一つの現われであるし、世代と云うものを考えるなら、人間のよき事業であつて、ラーベが「年代記」の序文で謳った「一つの時代はその為し遂げた事業の成果を必らずや次の時代につたえるべきものである」と云う主張の自作での具体的な実証であらう。こうした父の姿の象徴として遺されたものが、彼の乏しい才能の中から書かれた一冊の詩片と彼の仕事台の上からいつも知らない世界の光を投げかけていたガラス玉とである。「息子の蔵書の中で聖書とシエクスピアとの中間に位する名譽ある場所を与えられた」この冊子は、息子にとっては父の姿を通して「低き暗から高きへ、光へ、美へ永遠に立ちのぼらんとする民族精神の感動的しるし」と云う意味を持つ象徴的存在物であつた。又「息子の精神の中で父の像と次第に解き難く結びついていった」ガラス玉も、在りし日の父の姿を映し出し、その精神を伝える象徴的なものであつた。父の早逝の為に、ハンスは直接には彼から何の導きも受けなかったが、主人公の Hunger を規定している周りの世界の第一の人間と認めねばならぬのは、右の様な形で「無数の糸が彼の生命から息子の生命へつながっている」からであり、この親子のつながりと云う事は作中で一つの重要な要素となつて来る。

母クリスティーネは、亡き夫の意志の代行者と云う意味に於いて、ハンスを見守る人間であつた。代行と云う性質上、その行為及びその対象には、自分の意志をさしはさむことが出来ない。彼女は、息子に伝えるべき夫の Hunger

の内容には充分な理解を持っていなかったから、或る意味では知的主体性の乏しい女性とも云えよう。「彼女は、夫アントンがその為に苦しんだ同じ Hunger が今わが子に現われて来たことだけしか知らなかった、それを理解することは出来なかったが、非常な尊敬の念を抱いていた。」故に彼女に於いて為し得る事は、夫の願いを或る程度盲目的に実現するよう努めることである。然るに、小市民階級と云う彼女の生活環境を考え裏返してみると、この盲目的と云う事は、夫に対する全幅の信頼と愛情のあらわれであり、「女性の心は愛のために血を流さねばなりません、女性はこのことに喜びを持たねばなりません」と云う彼女の言葉通り、幾多の艱難を克服して使命を果し得た力のもって現われる根源でもある。彼女はまさしくラーベが好んで描く家庭的で、夫に対する貞節と愛情を第一とするラーベ的モラルの女性である。他方代行者にとっては行為を実行に移すことが重要となる。クリスティーネの場合、それは夫の意志の貫徹のために払われた苦勞と努力の中に見出される。「クリスティーネ夫人はどんなにしばしば飢の身をベツトに横たえたことであろうか、どんなにしばしば出来る限りあらゆる欠乏を耐え忍んだことであろうか、苦難はあらゆる形で女手一つの苦しい生活に迫って来たが、彼女は勇敢に対抗したのだった」と云う文章にも表白されている如く、愛情に基いた代行者の行為とは、謂ば精神的な Hunger の達成のために物質的 Hunger を忍耐しなければならぬ苦勞であつたと云えるだろう。これはハンスにとって最初の重要な体験であつた。彼女は自叙伝的要素の強い女性としてハンスを規定する第二の人間であると看做し得るが、彼に於いて問題とされる Hunger の内容規定が父から由来するものであるに對して、寧ろその実現実行の役割を通じてハンスを導いているのである。これら二者はそのいずれが欠けてもならぬ存在であつて、「わたしたちは完成しましたよ、アントン」と云う自己の義務の完了を確信した時の彼女の言葉のように、まさしく「わたいたち」でなければならなかったのである。

グリユネバウム親方やシュロッターベックおばさんも、のちに世に出て行くハンスに幼年時代、故郷の世界の息吹

きを最後まで伝え、現実の苛酷な世界の中まで彼を見守って行く故郷の保護者であると云えよう。ウンヴィルシュ家の屋根裏部屋で手仕事をして暮している後者には、生と死の境界線をぬぐい去る力、明るい真昼に死者が生きた人間になって見える不思議な力が具っていた。これは或る時にはモーゼスの悪者であることを最初に見抜く予見的な力として、又童話物語の朗読にふさわしい何かこの世ならぬ力、少年のファンタジーを強める浪漫的な力として、或いは不思議な保護の力として現われて来る。又前者は、最初うまれたばかりのハンスを靴に喩えて「みんなそろっているかね、紐も脚部も上革も甲もかがとも底もな、塗りも釘どめも上等か、磨きもよいかな」と云ったり、正字法に悖る手紙を何回も書いたりする特異な態度に依って一種の諧謔の役割を成す人物として登場している。彼がハンスの進学に頑固に反対する箇所は、中途半端な学のために却って生ずる高慢さ、即ち仮象的価値に対する警戒の念と職業愛と云う小市民的質気の現われと解すべきであろう。「先生さん」の訪問にいたく恐縮したり、ハンスの卒業試験の際には、盛装して一時間以上も門の所で待ち構え、その上首尾を誰よりも喜ぶあたり、善き意味での小市民的俗物、ラーベ的奇人の一人である。しかしこのおばさんとこの伯父とは Hunger と云うものにどんな考えを抱いていただろうか。

「『あゝ神様、ハンス、人間とは一体何なんだ？ 人間とは生涯一体何たるものを耐えねばならぬのか？！ こんなにも大きな飢をな—』

『こんなにひどい渴きをもさ！』とおばさんが口を挿んだ。……伯父さんは厳めしく、しかし幾らかぶりぶりして続けた。『天使たりともそれを味わなかつたやつは決して信じない程の飢と—渴きをな。人間はうまれた時何をする？ 乳を吸うわな！』
『も心つけば何をする？』……『何回も酒をがぶくやるさ』とおばさんは不平らしく云った。『手の届かない高い所にぶらさがっているものをなんでもかんでもはしがり飢えるのだ』とおじさんは腹立たしげにぶつぶつ云った。『図々しいやつは何もくれてやる値打がねえ、しかし控目なものは確かに何一つ得ることが出来ない。坊主、お前の親父はな、滑稽な Hunger とおまけに図々しい Hunger とを持っていた、あれは靴屋であって同時に学者であらうとした。そこから何がうまれたらう？ 何も

出てきやなかったわ、お前の伯父のこのニ、ク、ス、さんが今此処にいらっしやるのも、持ち前の大変な慎しやかさがあつたればこそ、毎日のパン以外に何も望まなかったためですわい』(S. 161~162)

この伯父も人間には色々の Hunger があって、その為に苦しまねばならぬことを知っているが、我が身に不相応な Hunger を抱いていた所で一体何になると云うのだ、結局のこるものは無にすぎぬ、アントンがよい例だ、だから自分は利巧だから見切をつけて日々のパンだけで満足しているのだと主張している。此処にアントン及びのちのハンスとの伯父との相違が認められる。自分に不可能なものの実現を息子に於いて期待した行為は意志の継続であって諦めではないし、願いは「完成した」と感じられているのであるから、そうは受取らないこの人達との間には可成りの違いがある。「君もあらゆる種類の大きな飢を忍ばねばならぬだろう。でも私と同じように満足するだろう、だって結局誰でも一度は満足するのだからね」と述懐するシルバーレップフェルも諦めと云う点ではこの人達に属する一人である。

この様な周りの世界に規定されたハンスの Hunger に自主性を認めるとするなら、それは時間的な変化発展を通してであり、独自の体験が必要とされる。まず彼は「人生で多くの飢を忍ばねばならぬすべての人々と同様、あらゆる点で特殊な胃袋を持っていた」のである。この胃袋は最初物質的な飢を覚え、食物を求めたが、学校へ行く頃にはパンやお菓子欲しがるのとは違った「何か定かならぬ飢を感じる年頃」になっていた。これは、父と同様の精神的 Hunger の萌芽であった。そして先生の哀れな身の上を聞いた時、弱者の味方になろうとする正義への Hunger を感じ、これが彼をモーゼスと結ぶことになった。ゾフィーとその死は、彼には彼女が「この眠りの中でみどりの枝に黄金の林檎のみのっている水遠へと移っていった」のだと感じられたように、彼の神秘的な感情、無限への憧れを一層深めることになったのである。そしてモーゼスの店で知った広き世界の予感、その世界への憧れを掻立てた。こ

の頃になるとハンスの Hunger は未だ知らぬ世界への憧れ、それを理想的なものとしてのその達成への努力となつて来るのであり、高校進学の希望を表明した時も、具体的対象に向けられた特定の Hunger ではなく、未知なるもの——遠いもの——理想的なものへの Hunger に他ならず、学習といった局限された特定な知に対するそれは却つて不定なる知、理想への憧れによつて妨げられている。この限りに於いて第一部に現われた彼の Hunger は精神的なそれと云うより寧ろ感情の Hunger、魂の Hunger と呼ぶ方が妥当であらう。このハンスの世界と全く対照的なのがモーゼスと彼をとりまく世界である。

「彼の父も学問に対して亡きアントンと殆んど同じような大いなる尊敬の念を抱いていた。しかし前者が学問をそれ自身のために尊敬していたに反して、後者はその中に金と同様防禦の手段となり武器となり得る護符を見出し得たと信じていた……そしてアントン同様彼もこの強力な防禦と攻撃の武器でわが子を充分武装させようと決心した。……アントン同様彼もわが子の誕生以来その子の将来の中にのみ生きていた。」(S. 59~60)

右のように、ザムエルも学問に対する尊敬と息子の未来に生きる点ではアントンと変る所がないが、その尊敬と斯る態度の起因する根底には本質的な相違が見出される。一方は学問自体に学ぶだけの価値を見出しているが故の尊敬であり Hunger であるが、ザムエルの場合は他の目的のための単なる手段なのである。これが二者の世界の相違を示す第一点である。しかしザムエルの態度は彼の過去を見る時、或る程度是認さるべき理由が認められる。彼はこの町へ移つて来た時も「屠殺場へひかれて行く家畜のように関税を払わねばならなかった」如く、ユダヤ人なるが故の圧迫と屈辱を受けて来た。だからユダヤ人の子として生まれたモーゼスも、父と同様の考え方を持って不思議ではなかった。ところがこの二人の間には、アントン、クリスティーネとハンスとの間に見られた親子のつながりは見出せない。このよい例は、ザムエルがユダヤなるが故の圧迫屈辱にも拘らず、自己の民族に対する誇りを捨てなかった

のに反し、息子にはそれが全く認められず、パリへ赴く彼の「僕には何時でも自分の好きな時にドイツ人になる権利があるし、又自分の好きな瞬間にこの名与をすてる権利がある」と云う言葉にも明らかである。民族と云う概念がラーベ文学に於いて如何に重視されているかを知る時、先にも述べた「民族精神の感動的、い、し」の有無こそ、二つの世界の第二の本質的相違と云わねばならない。ザムエルはアントンと同様息子の未来に生きる夢みる人であった。夢みること、ファンタジーと云う点で彼はハンスの世界の人間と異ならなかった。

「彼は自分の空想^{ファンタジー}をモーゼスのように殺してしまつてはいなかった、それは彼を高くへ運び、しいたげられた暗い存在を越えて彼を遙か彼方へ運ぶものだった。それは彼を愛撫しながら揺籃にのせて夢の中へつれて行くものだった……しかしモーゼスはこの半ば、子供、父をひそかに軽蔑していた。」(G. 88)

この様に、結局はファンタジーが殺されてしまい、その存在が許されないと云う此の点にこそ、ハンス及びその世界との最大の差違があり、第三の相違点に数えられよう。「モーゼスには冥想のため行く手が妨げられるような事はないと云う利点があった」との一章には、著者の何たる苦笑と皮肉とが感じられることだろうか。ハンスと違いファンタジーを早く殺してしまったモーゼスは父の精神ではなく、その望まれた結果のみを受継ぎ、あの決定的瞬間にその本性を顕わすのである。即ち、父から多額の金貨を見せられた時、彼の Hunger は賤しむべき金への Hunger 以外の何ものでもなくなってしまう。そして彼は「父が自分のために蓄積してくれた富に附随している苦勞、心配、愛情については何も考えず……この瞬間から幾千本の黒い糸が将来につながった」のであり、彼を間接的な尊属殺人の行爲へとおいやる。この様に、彼の受継いだものは愛情とか魂とかではなく、物であり金、袋であつて、その Hunger は物質的な方向に決定づけられた。この点に第四の相違が見出される。「この二本の道はラーベに於いて単に並列しているばかりでなく、見かけは一つになるために、しかし本当は戦い合うために重なり合つてゐる」とのグラザーの

言葉の様に、先に進めば進む程 „Entweder-Oder“ の対立の度が加わり、価値概念に基づくラーベ的ドアリズムが明らかになる。次にこうした価値概念から、以上の相違点を考察してみよう。

第一の相違点は何を意味するであろうか。それは真の価値性と適法性とを厳しく峻別せんとする考えや態度を示している。此処には明らかに価値の問題、道徳の問題がある。即ち或る行為や態度の形式及びその結果に於いては完全に正しいと判断され乍らも、しかもなお正しきものの実現を根本的な動機とせぬ諸々の行為や態度と云うものが存在する。このような行為態度は人間生活の諸点に於いて、又その行為や態度のもたらす結果に於いて、甚だ有用であり好都合である場合が多いが、それは真の人間の価値を持つものであろうかとの疑問が残る。学問を尊敬すると云う態度ではアントンもザムエル、及びモーゼスも変らなかつた。然るに、これは同じ正しい動機から出たものではなかつた。結果に於いては人間的に又道徳的に正しいとされ乍らも、即ち道徳律に適合し乍らも、この態度は単に適法性と云う価値への要求を有するのみで、真の人間的な価値とは何らの関係も持っていない。斯くて、有価値性は心の内容、心の志向、魂と云うものを無視して、その結果のみを問い、その道徳律への適合のみを問題とする適法性、即ち一般に云う結果主義《Konsequentialismus》なるものとは峻別されねばならない。この主張こそ意欲並びに感情を停止すれば最早や価値は存せぬとの主張、行為乃至態度の根底に横たわる意志との関連に於いて、その存在を是非すべしとの主張なのである。この適法性と真の価値性とを峻別し、動機の価値性を重視したのがカントの道徳論であつた。

「この世界の何処に於いても、否一般にこの世界以外に於いてさえ、たゞ善なる意志の他には無制限に善と看做されるものを考へることは出来ない。理解力、機知、判断力その他名称の如何を問わず、精神の種々なる才能、或いは勇氣、果斷、堅忍不拔等の氣質の諸性質は疑いもなく多くの点からみて善きものであり願わしいものである。然し、このような自然の賜物を使用すべき

所の、そしてその特殊な素質をそれ故に性格と称される所の意志が善ならざる時は、それも極めて悪なるものとなり、害あるものとなり得べ。」(I. Kants Werke, hsg. v. E. Cassirer Bd. 4, S.249)

明晰な頭脳も富も財産もそれを用いる意志が善なるものでなければ、この上もなく危険なものとなるこのこの論は無条件の価値をただ意志のみに認めているが、この意志の代りに同じく欲求の感情を意味する Hunger に置き換えればそれはまさにハンスとモーゼスの第四の相違に適応される。³³ ハンスの Hunger が精神的なものであり、善なるものの Hunger であったのに対し、聡明な知性と理解力の点で、更に富の点で遙かに彼にまさっていたモーゼスの Hunger は、それにも拘らず金への Hunger であり、権力への、悪しきものへの Hunger でしかなかった。此処に真の価値はいずれに置かれるか明らかである。然るに詩人ラーベはこれらを純粹に哲學的問題として取扱おうとせぬのは蓋し当然である。即ち此処で彼は、富自体よりも富をつくらんとする力の方がずっと重要だとの表現がなくてはまる市民階級の中に現われて来た功利主義乃至はプラグマティスムを問題にしているのである。ラーベは人間と機械の座の転換、人間は文明の奴隸として機械に奉仕しなければならぬ危険性をいちはやく予見し、この転換に富の獲得や効用性に重点を置こうとする文明觀は大きな疑問につきあたる時の来るのを見抜いていた。これが、過去の情勢と較べられる時、文學史的には特に政治的進歩性を至上理念とする傾向主義文學に対する疑問の提示とも解釈される。然し、とにかくこの近代社会が孕む危険性の予見、現代的危機觀の先取は、彼を勢い、靜的な伝統的市民性の中に伝えられて来た日常性と云う市民的モラル、忘れられた魂の素朴性、民族性の注目へとむけたのである。此処に先の第二、第三の相違点の意味がある。民族と空想、即ち伝統を受する素朴な精神と功利性を支える合理主義への反精神Ⅱレアリテートの中での浪漫性に光があてられたのだと解されよう。詩人はこの第一部で少年時代の浪漫性を強調し、否寧ろ少年時代、青春時代の特性を浪漫的なもの、理想への Hunger = Phantasie でとらえ、この特性が将来の成

長の基礎として不可欠な要素であり体験だと看做しているのである。

抑々偉大なるものに対する Hunger や憧憬の念が強いことだけで、既にそれは浪漫性の一要素ではなからうか。してみるとハンスを守る人達は少年時代と云う時間性の中で捉えられた彼の浪漫性を擁護している人達であり、この故郷の世界とハンスとの関連は浪漫性と彼との関連と云うことになる。「モーゼスはハンス及び浪漫主義者の森の孤独を全く無意味なものだと公言した。そして彼は、この愛すべき言葉をきくといつも胸くそが悪くなると言い切る程の大胆不敵な男だった」と云う一章は、逆にこの関連を立証するものである。そしてこの関連、この体験の有無がのちの成長に如何に決定的影響を与えるものかは、次の言葉によって予知されている。「次から次へと変わりゆく一連の絵となって子供の時代が彼の目前を通りすぎた……モーゼスにもあの下谷合いの町に故人となった人がいたが、彼はその想い出を悉くふりはらった。彼はノイシュタットの町を憎んでいた。」この小説の自叙伝的要素は他の如何なる点にもまして、斯る少年期の浪漫性にこそ求められるのである。

此処に極めて注目すべき問題が現われてくる。眞の芸術とは人間をしてあるがままの現実の拘束から自由な天地へといざない、同時に又永遠の眞理、永遠の理想が現実性を有した具象の中に現われるようにするものでなければならぬ。現実そのものであってもならないし、現実から全く遊離した幻想の世界であつてもならない。芸術的創作の眞の世界と云えるものは詩的空想に依つて媒介された世界である。この理念を一つの文学的主張にまで高めたのはオットー・ルートヴィヒである。彼はその著「戯曲研究」の中の「戯曲論の考察」の中で次の様に述べている。

「此處で問題になるのは、通俗的な空^{ファンタジー}想ではなく創造的空想に依つて媒介された世界である、創造的空想は世界を再創造するのであり、所謂空想の世界即ち無関連の世界ではなく、寧ろ反対に、その関連性が現実の世界に於けるよりはるかに明瞭である世界、部分的世界ではなく、そのあらゆる条件、そのあらゆる結果をそれ自身の中に持っている纏つた完き世界を創造するので

め」(Ludwigs Werke in 4 Teilen, hrsg. v. A. Floesser, vierter Teil. S. 314)

彼自身も認めているように先の傾向主義文学や、後の自然主義文学との対立概念とされている「詩的レアリズム」は、浪漫性(空想の世界)と現実性(現実そのままを写した世界)と云う二つの性格を共に兼ねそなえた世界を、詩的創造に依るその綜合を芸術的真とするものである。一般にラーベ及びラーベの作品は詩的レアリズムに属するとされているのが文学史の通説である。そこで、本来人生の展開や世界を時間の場に於いて描くのが小説であり、又この作品が發展小説であると云うことを前提とするなら、これが詩的レアリズムの作品と認められるには、浪漫性に続いて次ぎには現実的要素が主人公の上に加えられ、現実の中での人生体験が要求され、最後にこの対立的性格の綜合が主人公の姿を通して具象化されねばならない。これは、究極に於いて達成された世界が何を意味するかと共に、真に興味ある問題であり仮説である。はたして単なる仮説にとどまるものであろうか。これが第二部、第三部に於ける最も重要な問題点となつて来るのである。

(第一部完、ラーベ忌五十年の年十月)

本文中の引用箇所を示されている頁数は、目下刊行中の Wilhelm Raabe, Sämtliche Werke in 20 Bänden, hrsg. v. K. Hoppe の第六巻の頁数を意味する。

註(1) Hellmuth Mielke.: »Der Deutsche Roman des 19. Jahrhunderts« S. 278

(2) ラーベの存命中に十版を重ねた作品は殆んどなかった。その中で「雀横丁年代記」と「飢餓牧師」の二作は例外である。最近の研究では今日までに前者は約二百版四十数万冊、後者は六十三版三十万冊前後が出ている。これには戦時中の出版や特別出版が含まれていないが、この他英、仏語をはじめ各国語に譚訳されている。勿論今日のベストセラーからみれば大した数ではないが、彼の没後今日までの五十年間この数が常に上昇の一途をたどつて来たことにこそ深い意味がある。

- (3) 政治への関心と参加の具体的事実としては、一八五九年フランクフルト・アム・マインで結成されたドイツ国民同盟の集会への活潑な参加があげられる。そして、これは初期のオプティミスト的ラーベの一面を論証する根拠として大切な事実である。尚これらについては H. Spiero : »W. Raabe und sein Kreis« の中の一文 H. Leonard »W. Raabe und der deutsche Nationalverein« に述べる。
 - (4) H. Pongs : »Wilhelm Raabe« S. 123
 - (5) W. Fehse : »W. Raabes Briefe« In alls gedutig« S. 10
 - (6) 同右 S. 14~15
 - (7) 一八五八年からベルタとの結婚の一八六二年の中頃までがこの時期に当る。一八五七年十二月には「詩をつくれる能力が自分にあることを発見した」と喜びの言葉を記している。独立した詩集はないが、これらの詩は散文の中に挿入されている。
 - (8) ラーベにはマークデブルク書店見習いの時代から、ホノラタイオーレンの社会やその風習、習慣に対する反撥があった。これは逆比例の意味で彼の市民性とも関連するもので、次作「アブ・テルファン」に最も鋭く剔抉されている。ベルタ・ライステの父は上告裁判所の弁護士、祖父はブラウンシュバイクの校長でレッシングの友人でもあったと伝えられている。又母は短篇「勝利の花環に」の執筆動機を与えたことでも知られているように(クヴェレ第二号—一九五七年—拙者小論「ラーベの一面」参照)、フランス亡命貴族の血をひいた人であった。こうした点については内山貞三郎博士還暦記念論文集三四頁の小論「ラーベの小市民的フミニテットについて」をも参照下されば幸いである。
 - (9) ラーベには一種の Wortspiel によって逆説的なフモールを狙った所が屢々見受けられる。この場合も、人の和を説くべき牧師の名が Zänker (喧嘩好き) だったり、素直で真面目なハンスの姓が Unwirsch (unwirsch—粗暴な—と同音) であったり、更に一度も銀のさじで食事をしたことのない貧乏教師の名が Silberföbel (銀のちじ) であったりする。
 - (10) W. Fehse : »W. Raabes Briefe« In alls gedutig« S. 33. 友人グララーザー宛の書簡(六三年七月三日附)には次のように書かれている。
 - (11) 「今僕は飢餓牧師の第一部を完成しましたから、それについて君に一層詳しいことを知らせることが出来ます。この作品は再び三巻になり、各巻は『森からの人々』の場合と同様、僕らの原稿用紙で二十冊になります。しかし今度はつめてかきましたので活字になれば各巻はもう少しふくれることになるでしょう。」
- ラーベの備忘録に次の様な意味深い詩の書かれてあったことが報告されている。

「市場をさまよいゆき、」

„Über den Markplatz zu schweifen,

横丁を通り抜け、」

Durch die Gassen zu streifen,

かげから光りを取りいだす—

Licht aus Schatten zu greifen—

これぞ詩人の使命なり。

Das ist Dichterberuf.

(12) Martha Glaser ; »Dichtung vor Gott« S. 347

(13) カントの「道徳哲学原論」の冒頭に謳われている意志とこの Hunger の同一性については既に千代正一郎先生が指摘されている（九大独仏文学研究第二輯昭和廿七年）が、筆者はモーゼスとの比較から、第一部内でのこの同一性が意味する動機、善の強調の中に、結果の如何をむしろ問題とせぬ浪漫的要素を見ようとするものであって、中心点は第二部の現実界を通った主人公が最後に達する世界の中に具象化されているラーベの文学理念、芸術的理想との関連に於いて結局この同一性、この動機の善が如何なる批判をうけるようになるかにある。この比較は、又この作品の究極の主張を説く鍵にもなるからである。

(14) この作品の自伝的要素としては他に、父の早逝、そのための母の苦勞とその手による子供の養育、主人公の自然に対する親しみ、専ら読書による知識の獲得、学校の授業よりも童話伝説への愛著等が指摘される。

——関西学院大学文学部助手——